

潮染む心

039 栄東高等学校 鉄道研究部

東京都心から電車で80分、運賃は1000円ちょっと。

横須賀の外れにある、懐かしい街に帰ってきた。

市の中心から少し離れた、かつ目立った観光地もないような、そんなところだ。

大通りから1本入った、線路沿いの道を進む。

すぐそばを、海と砂浜をあしらった伝統の帯が駆け抜ける。

昔からずっと変わらない、見慣れた光景だ。

列車が過ぎ去る。視界が開ける。

太陽が閃かす水面と、浮かぶ黒鉄が見える。

その瞬間、僕は胸の高鳴りを抑えられなくなった。

潮風が香る。

潮騒がさざめく。

潮頭がきらめく。

別にどれも、特段キレイなものではない。

なんならこの辺りの海は、普通の海よりも少しくすんで見える。

だけど、僕にはこの全てが、どうしようもなく愛しく感じられる。

心が、潮染んでいく。

「ただいま。」

思い出の公園から向かいの基地を眺め、僕はそう呟くのであった。

